赤ちゃんの四季（30）　平成20年夏

花づくりから学ぶ子育て

我が国の新生児学の生みの親である馬場一雄先生が、この4月に「花を育てるように　―　小児科医の思い」という素晴らしい育児書を刊行されましたので、その一部を紹介したいと思います。育児の基本的態度には、花づくりから学ぶところが大であり、先生は3つの教訓を挙げておられます。

まず最初の教訓は、いくら園芸の達人でも、ばらの木にカトレアの花を咲かせたり、カーネーションの茎に矢車草の花を開かせたりすることはできないという点です。

二番目の教訓は、無理をしないで自然に育てるということです。しかし、どんな草花でも氷雪や暴風雨からは守ってやらないと美しい花を咲かせません。子育ても、危険なことと道徳的に許せないことを、小さい時からはっきりと禁止するしつけが必要ですが、あとは自然に伸び伸びと育てることです。三番目の教訓は、植物には十分な日光や水と、豊かな栄養を肥料として与えることが大切ですが、育児において最も必要なものは父親や母親の豊かな愛情だと述べられています。

わが国では学校教育の崩壊、家庭教育の崩壊から、教育の再生が叫ばれています。「教育再生の条件」の著者である神野直彦氏は、製造業界では次第に複雑になってきた労働を、特別の知識を持たない人間でもこなせるような単純労働に分解し、人間を機械の部品のように働かせようとするやり方がとられており、学校教育においては、こうした非人間的な労働に耐える服従、従順、勤勉を教え込もうとしていると、今の教育再生会議の方向性に批判的な意見を述べておられています。

経済的に国際競争力をつけることを第一義とした人材育成が問題であり、「学ぶこと」は競争に勝つための手段ではなく、自らが学ぶことによって能力を高め、自ら「学ぶ喜び」、「生きる喜び」を感じるのが人間であり、それを支えるのが人間教育であることを忘れてはならないのです。教育も、育児も原理は同じです。